

主張

金属労協副議長／基幹労連中央執行委員長 内藤純朗

本当にそうなの？ ～対症療法的政策への不安～

これから述べることは、私の属する基幹産業とはあまり関係がない。だから金属労協機関誌の巻頭主張にふさわしいかどうか躊躇する思いもある。しかし、「日ごろ思っていることを何でも書け」という編集部の勧めにしたがって拙文を起こすこととした。

最近主張されているさまざまな政策の中に、私の少年時代の体験に基づく素朴な疑問を払拭できないことがある。そのひとつに「学級の少人数化」がある。

多人数学級

私の小学校時代は1クラス49人であった。1年先輩のクラスは約80名であったものを途中で2クラスに編成替えをした。戦後における教員や教室の不足からくるものであったら

うが、私自身の記憶では「クラス仲間が多くて困った」ことはない。先生の目が行き届かない、十分な教育が受けられない、ましてや学級が崩壊するといった苦い思い出はない。

担任は1年生から2年ごとに代わっていったが、3人の先生は年代・性別ともに異なりながら、それぞれに熱心な教育者であり、学校における子供の保護者であり、全ての生徒が尊敬し慕う存在であった。これは私の学校だけが特殊で他では学級崩壊などが横行していたかという点、同年代の誰に聞いても、そんな話はない。

もちろん、少人数の学級であればもっと違った教育が受けられたかもしれない。しかし先生から受ける愛と恩がその分増えたとは思われない。教師とは25人学級であれば25人

分の愛を、49人学級であれば49人分の愛を子供たちに与えるものであって、クラスの人数が倍になったからといって一人当たりの愛情が半分になることなどは決してない。私は3人の小学校担任からきちんと一人前以上の愛情と師恩をこらむった。

こうして育った昭和20年代生まれは世界を驚かすほどの戦後復興を成し遂げ、日本を先進国に成長させたのである。何かが間違っていたとは思われない。その人材を育てた49人学級に問題があったとは思われないのだ。

ではなぜいま、学級が崩壊するのか、少人数学級や複数担任制が叫ばれるのか。もちろん昭和30年代とは異なるいろいろな問題があるかもしれない。しかし取り巻く環境が毎年変わるのには今に始まったことではな

く、昭和30年代にも問題は多数あった。わたしはいまの教育における問題は1クラスの生徒数ではなく、別のところに根本的な原因があると思っっている。少人数学級は「対症療法」ではないか。

子育て無支援

次に疑問に思うのは子育て支援や仕事と家庭の両立支援という政策である。私は4人兄弟で、家には祖母がいて8人家族だった。当時、4人兄弟というのはむしろ少ないくらいで、私の同級生には5人あるいは6人兄弟も多かった。もちろんみんな貧しかった。給食費を滞納して黑板に名前を書かれたりした。持ってくるのを忘れただけだと思われていたし、そのように振舞っていたが、事實は払えなかったりした。今の給

食費支払い拒否とは天と地ほど違
う。しかし不幸ではなかった。

両親とも建設現場で働きながら、
祖父母と一緒に猫の額ほどの田畑を
耕し、4人の子供を育て教育し世に
送り出し、家庭と仕事を両立した。

人生の中に「子育て」というような
独立したジャンルはなく、「生きる」
という一連の暮らしの中にそれは組
み込まれていた。親にかまってもら
える時間はごくわずかで、それだけ
にその時間は黄金のように光り輝
き、私の脳裏に今でも深く刻まれて
いる。決して不幸ではなかった。

私の母は不思議なことに食事の途
中でお腹が一杯になり、自分のおか
ずを子供たちに分けてくれた。美味
しい物をもらおうと「私は嫌いだから」
といって子供たちに分け与えた。無
邪気にそれを食べていた私は泣きた
くなる。母は子育て支援も、家庭と
仕事の両立支援も受けずに、身を削
るようにして子供を育てた。その母
は今年80歳になり「あの頃はいい子
供たちを持って幸せだった」と笑っ
てくれる。

産むのが大変だから、育てにくい
から、経済的に厳しいから少子化が

進むのだろうか。このような少年時
代を送った私には、少子化の原因は
もつと他にあるのではないだろうか
と思えて仕方がない。子育て支援は
「対症療法」ではないか。

男女悪平等

この他にも、「性別による役割分
担は悪である」という風潮にもあま
り同意しかねる。もちろん「女のく
せに」とか「男だから」という固定
観念にとらわれた頑固な意識にも辟
易するが、私は子供の頃から「女性
は守るべき存在である」と教えられ
た。重いものは男が持つ、危険なこ
とは男がやる、当たり前だと思っ
ている。

「オイお前こっちへ来い」「何や
ってんだよバカヤロー」という会話
が女子高生の一過性の流行に過ぎな
いとしても、私の時代にはなかった。

男女の暗黙のうちの役割分担や、
男はこうあるべき、女はこうあるべ
きという概念が、それはそれで一つ
の平和を築いていたのではないか。
男女同権のためには何でも男と女を
同じに扱えばいいだろう、という
「対症療法」が行き過ぎた結果、男

は守るべき女性を失い、女は頼りに
なる男性を絶滅させたのではない
か。このことがわが国の男女関係を
殺伐なものにしたと思うのは私だけ
だろうか。

根源対策

実は科学の発達した現在でも、い
わゆる「風邪」の原因はわかってい
ない。風邪菌は発見されていないし、
ウイルスによるものなのかどうかも
明確ではない。巷に來回っている風
邪薬は、「風邪の諸症状を緩和する
薬」に過ぎない。風邪の根本対策は
まだ発見されていないのである。

だから風邪の対処療法は無駄だ
など言うつもりはない。現実には起
きている問題を速やかに解決すること
は必要不可欠である。しかし同時に

その問題の根源を断つことはもつと
重要なのである。対処療法である風
邪薬はどんな良い薬でも、根本対策
までのつなぎに過ぎない。

問題の根源を追求しそれを断つこ
とは、多くの時間と費用を要し、暗
黒の闇を行くが如くの挫折を人に求
める。時間の無駄だから対症療法で
いいではないかという考えもある。
しかし、今でも風邪ウイルスは探し
続けられているし、他の研究も行わ
れている。

教育問題も少子化も男女同権も、
対症療法を続けながら根源対策を迫
求しなければならぬように思え
る。そのような途方もないような研
究は、政府や政治家よりむしろ労働
組合にこそ向いているのではないか
と思うこのごろである。



金属労協副議長／基幹労連中央執行委員長

内藤 純朗

ないとう・じゅんろう

1950年6月島根県出雲市生まれ。1970
年三菱重工に入社し、横浜造船所機械
部に配属。大型ごみ焼却炉など環境装
置の設計に従事。84年に横浜製作所支
部執行委員。支部書記長、副委員長を
経て、2000年三菱重工労組書記長、02
年造船重機労連書記長、03年基幹労連
事務局長、06年9月基幹労連中央執行委
員長（現）、同年同月、金属労協副議長
（現）、同10月連合副会長（現）